

FD 通信 No. 6

飯田女子短期大学教務（FD）委員会

<http://www.iidawjc.ac.jp>

「この地域になくてはならない短大」の使命

教務（FD）委員長 松崎行代

2012年8月の中教審答申では大学教育の質的転換の必要性が提示されました。学生の主体的・自立的な学修を促すために、アクティブラーニングといった学習方法や大学環境充実が重要な要素として議論され、大学教育に関する学会や研究会、各大学ではその方向性や具体的取組方法について議論を深めています。またこれとあわせ、学力や学習意欲などの学生の多様化傾向が強まる現状への対処として、教育活動の質の向上が不可避の課題となっています。本学においてもこうした問題を同様に受け止め、FDを中心に話題にしてきました。どこの大学・短大においても課題の大きさは変わりませんが、長野県南信地域唯一の高等教育機関である本学は、地域の高校生・諸団体・行政・一般の人々の期待に応えるという大きな使命を担い、より緊張感をもって早急に課題解決に着手しその成果を示していかななくてははいけません。本年度行われた認証評価で「この地域になくてはならない短大」と評価員の先生がおっしゃった言葉の真意を受け止めると、教職員一同身の引き締まる思いです。

先日のFD研修会では、短大生調査（JJCSS2013）の結果をもとに学生の意識や生活実態から今後の教育・学生支援の課題および解決方法を話し合いました。調査結果から、予想以上に多くの学生が「地元にあること、資格取得が可能なこと」を理由に本学に進学していることが明らかになりました。こうした学生たちが教育課程を修了し社会に飛び立つとき自信を持てる力を修得していること、そして力を発揮して地域で活躍し、地域・職場が本学の学生を高く評価してくれること、これが達成できれば本学がここに存在する価値が明らかに示せると思います。

大学教育学会のニューズレターNo. 95（2014. 2. 5）には、「教育活動の改善につながる知識の創出のための有力な手段の一つは言うまでもなく教員の研究だ」と述べられています。そして、学術的に高い質を保つと同時に、教育改善のための諸活動に活用できる具体的で実践的な内容を持つ研究を教員が実践することにより、研究と実践の往還を通じた知識の創出がなされる。こうした知識の創出・検証・共有が大学の教育活動の原点ではないかと提言しています。学生に求める学び方や知識・力を教員自らが経験して身に付けていること、その経験をもとに教育を行うことが重要です。

教育の質保証とともに学生が学習成果を上げることが出来るよう、大学教員としての教育と研究活動のさらなる努力の必要性を痛感します。FDの組織的な取組みとともに、研究活動の推奨、研究・教育環境の充実など、短大全体の総合的な取組みも今後は見直していく必要があるのではないのでしょうか。

目 次

「この地域になくてはならない短大」の使命

教務委員長 松崎行代

<報告1> FD講演会

報告者：庄司洋江

家政学科 青木千恵美 看護学科 熊谷寛美

<報告2> FD研修会

報告者：小笠原京子

家政学科 太和田雅美 看護学科 神澤絢子

教育の質向上に向けてのPDCAサイクル ～平成25年度を振り返って～

家政学科長 友竹浩之 幼児教育学科長 黒岩長造 看護学科長 岩崎みすず

授業改善アンケートについて ～平成25年度を振り返って～

幼児教育学科 林晋子

看護学科 芝田ゆかり

家政学科 川俣幸一

＜報告1＞ FD 講演会

去る2月7日看護棟多目的ホールにて、平成25年度FD講演会が開催されました。学長先生はじめ54名の教職員の参加がありました。今年度は、「今どきの大学模様とFD 一戦後、日本の大学・短大の変遷と高等教育政策―」というテーマで、追手門学院大学社会学部教授そして学部長でもあられる小畑力人先生を講師をお願いし、2時間程講演をお聞きしました。

先生は学輪IIDAのメンバーであられ、飯田の状況も把握された上、今まで勤務されていた予備校、私立大学、国立大学の体験を元に、日本の高等教育の変遷についてなど、具体的且つわかり易く、多くの資料を提示されながらお話し下さいました。18歳人口の減少は以前から言い尽くされているものの、即座にそれに対応するすべを探し改革することは困難ですが、大学人皆の意識により、どれだけか将来が決定される要因になると思われます。そういった意味で今回の講演は、大学に身を置く多くの教職員が一同に会し考える機会に恵まれ、大変有意義であったと思います。現代は自然界や社会が大きく変わり予測困難な時代となり、答えのない課題に挑戦し生涯学び続ける学生の育成が課題であり、教員という立場で学生を職業人としてまた人として社会に送り出す責任を負うために、倫理観を持ちながら誠実に学問を追及することは当然ながら、新しい教育改革を成すことと学生目線の大学の構築が必要です。そのために大学の歴史認識をし、建学の精神に則ったり、飯田の地で私たちが取り組まなければならないことは何なのか、その方向性を示していただけたと思います。

今回は短時間での講演であり、さらに詳細に教えていただきたいという声もありましたが、それは飯田女子短期大学に身を置く自分たち自身がやらなければならない使命だと考え、一人ひとり自らが共同体の一員として行動を起こすことが必要ではないかと思います。

また、アンケートにつきましては、次回FD研修会、来年度講演会に繋げていけるよう委員会に報告しました。尚、アンケート記入をしていただいた皆様にはこの場をお借りし御礼申し上げます。（文責：庄司洋江）



「学び」のイメージ

家政学科 青木千恵美

小畑先生のお話から、日頃感じられていた「学生が変わってきている」の背景を確認することができたように思います。

教育課程の変化や、人口の推移と進学率の変化など、様々な要素からなる背景があり、今の状況があるのですが、先の見通しを持つことが難しい今、この先、生涯にわたり学び続けること、自身が進む方向を決めていく覚悟と行動が求められています。そして、変化し続ける社会の中で、生きる上で必要なことを意識し、吸収していこうとする、学ぶ習慣を備えた体質にしておくことが重要に思われました。

基本となる知識を覚え、基本とされてきた考え方をたどってみることは大切です。まず、受け継がれたレシピに学び、次の段階では、それを自分がやりやすい形に、また、自分が生きる環境や地域にあったものに組み換え、アレンジしていく。どんなアレンジが自分に合うか？その場に必要か？を考え、時には、基本に立ち返ることも必要でしょう。

基本とアレンジを組み合わせてイメージすると、学びを「とぎれのない流れ」としてイメージできるようになります。

FD 講演会に参加して

看護学科 熊谷寛美

講演をお聞きし印象に残ったことは、小畑先生の次の言葉です。18歳人口と進学率についてグラフを用い「現在は下り階段の踊り場、あと数年後には再び下り階段がやってくる。50代の教職員は逃げ切れるかもしれないが…」というお話でした。年々、学生の学力低下や入学試験受験者数の減少を肌を感じていますが、こうしてグラフで視覚的に見ることで強く危機感を感じました。高等教育政策の規制緩和がはかられ、競争的環境のもとで個性輝く大学が生き残り、その他は自然淘汰されるという時代にあって、教育改革は必須です。特に看護学領域は看護系大学の増設がまだまだ相次いでおり、短大の3年という教育期間の中で、どのように魅力ある教育ができるのか真剣に考えなければならないと思いました。まずは本学の現状分析を組織的に行っていくことが鍵になりそうです。今後は一教員として、アクティブラーニングを取り入れるなど積極的に授業改善に取り組みたいと思います。

<報告2> FD 研修会

3月4日(火)13時から、FD研修会が開催されました。今回は昨年秋に実施した『短大生調査 2013年(JJCSS2013)』の結果データの一部を基に、地域に1つしかない大学として本学がどうあるべきか、学科や立場を越えて話し合いました。

話の中から見えてきた学生像としては、次のような点が挙げられました。①自宅から通えて資格が取れるという理由で入学する学生が多いため、資格取得のために学習時間を使っており、サークル活動やボランティア活動等にあてる時間は少ない。②入学後の変化や卒業後重視することにおいて、「リーダーシップ」はあまり重視されていない。③「困っている人の役に立ちたい」と考えている学生が多いが、地域で活動する機会は少ない。④授業について「つまらない」と感じている学生もいる。

また、これらの事についての対応策としては、ある程度しかけや仕組みが必要ではないかという意見がありました。例えば、学生が活動したり談話したりしやすいように、食堂や中庭を整備したり、学生の居場所づくりをハード面からサポートして、コミュニティの場所を確保していくという案が出ました。ソフト面では、友達や先輩とのつながりの強化や、教職員との対話の機会を増やしていくこと等が挙げられました。ボランティア活動についても、地域を学びの場として授業に取り入れていくことや、ボランティアの機会を広げることが地域に本学を知ってもらう機会にもなり、地域貢献と募集活動にもつながるのではないかということが語られました。

一方授業については、授業改善アンケートは、学生のリクエストに応えるものではなく授業技術改善のためのものであるべきなので、見直しが必要であるという意見もありました。「魅力的な授業」、「わかる授業」を目指して、今後も教員としてスキルアップを図ることが求められています。

学生減の厳しい状況の中で、私達は今何をしなければならないのか、前回の講演会とこの研修会でそれぞれが考え、次年度に向けて小さくても一歩を踏み出したいと思います。



(文責 小笠原京子)

短大生調査から見えるもの

家政学科 太和田雅美

日頃接している学生を理解しているつもりでも、それは一方的な偏った見方でしかなかったのかもしれないと、改めて考え直す機会を持つことができた。学生募集については、本学に何を求めてきて入学してきているのかを考えることで、今後の募集活動の方向性が見えてくる反面、他大学等を選択する人達が何を求めているのかを、今後調査していく必要はあると思う。

本学は、少子高齢化が進むこの地域で学生を大切に育て、地域貢献のできる人材の育成や人のために役に立ちたいという願いをさらに伸ばしていけるような学びの場でなければならない。学生が、資格を求めて進学を決めてきてくれていることを大切に、その目的を達成できるようにしていかなければならないと痛感した。

他学科の先生と自由に話し合えたことで、多様な考えに触れて、自分が教員として何ができるのかを考えることができた。FD研修を機会に、来年度も教職員同士理解し合いながら、教育活動に協力し合っていきたい。

FD 研修会に参加して

看護学科 神澤絢子

今回のFD研修会では、短大生調査の単純集計をもとにそれぞれのグループで分析を行いました。まず、実態を見て感じたことは、私たちが思っているよりも余暇の時間が少なく、課外活動に取り組めていないなど、教員側との想いのズレがあったことです。普段の生活の中でもズレがあるのなら、講義の中でもお互いの望むところに対するズレが生じるのは、当然のことなのかもしれません。そして、グループワークや発表での他のグループのまとめから、相手を知るためには偏った見方ではいけないことも学ぶことができました。

今回の研修では、他の先生方からも多くの刺激を受けました。また、学生一人一人に合った関わりを展開するためには、様々な見方で関わる必要があることを改めて認識しました。現在の学生像も知りつつ、更に地域に根ざした短大にしていくために、自分自身の考えを見直すべき良い時間となりました。

教育の質向上に向けての PDCA サイクル ～平成 25 年度を振り返って～

年度末点検を実施して

家政学科長 友竹浩之

家政学科では第三者評価の基準項目に従って、「現状評価」→「改善への取り組み」→「具体的な行動計画」に対する「年度末点検」を各専攻会で実施した。

「教育目的・目標」については、来年度も各専攻とも同じ目的・目標とすることとした。今後もカリキュラムマップを活用しながら必要に応じて見直しを進める。

「学習成果」については、各専攻で次のことを確認した。授業公開の実施により教育課程の議論に多少なりとも取り組めたが、さらに一步進めるには至らなかった。科目レベル、分野レベル、カリキュラムレベルでの検証が進むようカリキュラムマップの活用をしていきたい（家政）。各授業毎に学生の自己評価を加えるようにした。15 回の内、中で 1～2 回ノートを回収して、学生の自己評価の点検をしながら、理解不足の学生のフォローをした。来年度も引き続き、きめ細かい指導を行うように努める（生活福祉）。単位・資格取得率・専門職への就職者数等を当面の学習成果とする（食物栄養）。

「教育の質保証」については、各科目の到達目標に対する達成状況について確認した。新任教員の授業目標の確認等も徹底していく。また、専攻科の学位授与機構の審査業務を通し、シラバスの内容とそれに見合う教員の資質の向上の重要性を認識した。

「学位授与の方針（DP）」については、各専攻で次のことを確認した。卒後評価の結果を鑑み、DP の見直しも進めていく必要がある（家政）。介護技術については、卒業時介護技術試験を導入し、国家試験に準ずる課題で 80 点を基準として合格するまで再試験を実施した。このことにより、基本が習得できていない学生の掘り起こしと、フォローアップが可能となった（生活福祉）。DP と学習成果は広い意味では関連している（食物栄養）。

「教育課程編成・実施の方針（CP）」については、各専攻で次のことを確認した。カリキュラムマップの形式が統一されたが、今後はその活用が課題となる（家政）。26 年度生より医療的ケアを導入するために、「医療的ケア」をカリキュラムに追加する申請を行った。各科目担当者は、シラバス作成時に再度カリキュラムマップを基に、該当項目についてどのように授業に反映させるのかを考える（生活福祉）。CP およびカリキュラムについて、点検し、来年度も同じ CP とする。26 年度は「社会生活と健康」の分野において、「社会福祉概論」の代わりに、「生活経営学」をおいた（食物栄養）。

「入学者受け入れの方針（AP）」については、各専攻で次のことを確認した。入学者のフォローアップについて検討を加え、現行の維持ということとなった（家政）。入試の面接時に、「人との関わりについて」の考え方を話してもらった。また、ボランティア等に参加したときに、高齢者等にどのような感情をもったのか、自分はどのようにしたいと思ったのか発言してもらった（生活福祉）。AP は来年度も同じ内容とする。26 年度入学生に対して、プレースメントテストを実施し、問題集を送付した。入学生の感想を聞いて、次年度の参考にする（食物栄養）。

「学習成果の査定」については、各専攻で次のことを確認した。シラバスと対応させたチェックシートは簡易なものを作成し利用を促したが、取り組み状況についての把握が不十分であった。学習成果の査定については今後も検討を重ねる（家政）。最終実習の事例をまとめて全員発表したことにより、獲得した介護観をそれぞれが自分の言葉で語ることができた。介護福祉士取得率は、94%であった。次年度から、28 年度導入の国家試験を見据えて、対策講座等を整備していく（生活福祉）。来年度も単位・資格取得率・専門職への就職者数を学習成果とするが、学習成果評価用紙による査定については今後も検討する（食物栄養）。

以上のように、本年度を振り返ってみた。

幼児教育学科、学習成果の検討

幼児教育学科長 黒岩長造

幼児教育学科では、学習成果のチェックのために、各々が自分の科目全てについて振り返りを行いました。数値化という情報を提供しながら進めてきましたが、現実には難しいものでした。若干の教員が定期試験結果の得点を挙げ、検証していましたが、ほとんどは観念的な情緒的な文章でありました。～という学生が多い、少ない、～と思われる、という表現がそれぞれの教員より散見され、数値化には至っていません。自分も含めてですが、やはり学習成果を目に見えるようにするということへの不慣れ感は否めません。

しかしながら、各教員が科目の到達目標とからめながら考察できたことは一定の評価の対象にはなっています。それぞれの目標を意識しながら、改めて授業構成を振り返り、学生の理解の深まり（この部分が数値で表されればベターと思いますが）を概観しています。これらのチェックは、次の目標設定に生かされ、更に授業方法、内容が改善されると期待するものです。

一方、授業の開始時点でのチェックは今後の課題の一つと捉えられます。学生の理解の深まりをチェックするには、最初の状態のチェックがあれば、その比較から、結果が見えやすい、分かりやすいことになります。技術系の授業が分かりやすいのはこの点、最初はできなかったのに、授業終了時にはできた、そのできたのが目に見える、

ということにあります。抽象的な要素の多い講義系の授業で本当にこの学生は分かったのかを確かめる手段が試験ですが、その試験の点数が、学習成果なのか否か。そこに最初の状態のチェックがあれば分かりやすくなります。今後の課題です。

いずれにしても、全科目の考察をしたのは初めてであり、次年度も PDCA サイクルを回し続けたいと考えます。

学習成果がみえるように ～来年度に向けて～

看護学科長 岩崎みずす

看護学科では看護師国家試験受験資格の取得が卒業要件であり、看護師資格の取得という明確な目的がある。従って、専門基礎分野と専門分野の科目に関しては、関係法規に定められた学習領域とその達成目標を掲げ、各教員が担当する科目の授業内容の組み立てを行うことになる。

今年度はシラバス記載内容の充実が図られ、それに伴って担当以外の科目の授業概要へも従来以上に関心が寄せられた。特に非常勤講師の担当科目については、前期途中に講師と連携し学習課題がより分かり易い内容に修正した。このシラバス記載内容の充実とカリキュラムマップの作成により、教員は科目間の関連の認識を新たにすると考える。もう一つ、今年度変化したこととして、1 年次の「キャリアデザイン」の開講がある。学士力を形成する汎用的なスキルであるコミュニケーション力、論理的思考力、問題解決能力などを身につけるとともに、学生自身が目指す“看護の仕事”“看護師像”を描くことを目的に、看護学科全教員によるオムニバス形式の授業を行い、多くの教員が手応えを感じた。

ここ数年看護学科の課題は進級要件に抵触して留年する学生が増加していることと、領域別実習で目標に達しない学生が増加していることである。進級要件に抵触した1年生の割合はH23年度、H24年度共に約9%であったが、今年度対象者はいなかった。本科は専門基礎分野と専門分野はすべて必修科目であることから、学年全体の成績を把握することで学習成果の獲得状況がある程度推測することができる。1年生の進級要件抵触者が減少したことを、学年全体の学習成果の向上の結果であると断定することはできないが、シラバス記載内容の充実や「キャリアデザイン」の学習成果が少なからず関連しているのではないかと考えられる。

今年度は、各教員が科目ごとに受講生全体の学習成果の獲得状況を分析して、学科全体で改善の方向を検討するまでには至っていない。看護師資格の取得という明確な到達目標があるがゆえに、個々の教員に任されてきた担当科目の学習成果を学科全体で見つめる時期にきている。

授業改善アンケートについて ～平成 25 年度を振り返って～

よりよい授業をしていくために

幼児教育学科 林 晋子

文部科学省では、教育に関する FD は総論的には教育の規範構造、内容（専門教育と教養教育）、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を意味すると定義づけられています。本学では、今年度より授業アンケートの内容が改善され、中間期には自由記述、授業終了時には設定された9項目に対して5件法で回答する質問紙調査を行うこととなりました。自由記述は、数値では計測しにくい学生の要望や現状を知るうえで有用な手がかりとなり、何をどのように改善していくかが明確になったように思います。質問紙調査においては、目標値を設定し1サンプルの t 検定を行いました。検定値をどこに設定するかで有意差がみられるかどうかが決まるため、正直なところ検定値の設定に迷いました。3、4、5 とそれぞれ検定値を変えてみたものの、すべてにおいて有意差が出てしまい、「目標としていた検定値から差があった」としか言えず、どう解釈していいものやら戸惑ったのが現状です。一方で、質問紙を用いて客観的に評価し、 t 検定を用いて検討することは、受講生全体の傾向を把握するうえで意味があると感じました。もしも、「授業改善がなされているか」または「教育の能力が向上しているか」を目的とて調査をするならば、中間期と終了時に同じ質問紙で調査を行って、 t 検定を用いて比較をしてみたかったなと思っています。授業評価アンケートの結果は目標(4点)よりも高く評定されており、一定の水準を満たしていると思いますが、まだまだ改善できる余地はあります。現状に満足せず、より良い授業を学生に提供していこうという FD 委員の先生方の気概を感じ、私も学生のために努力していきたいと感じています。

授業改善アンケートにおける本学の課題について

看護学科 芝田ゆかり

一般に、授業改善アンケートは教育機関が組織的に行う FD 活動の一環として、教育や授業の改善を目的に実施されている。学生が教員の講義やカリキュラム等についてどのような意見を持っているかを知ることは、改善のため

の貴重な情報であるため、積極的に活用することが必要である。

講義の改善は担当教員の努力に負うところが大きい。しかしそれに加えて学生の授業への積極的参加（学生の努力）、学校側による設備の充実やカリキュラムの改善（学校の努力）等、教員・学生・学校が一体になって取り組むことにより、更に効果が上がるとされている。

しかし、本学の授業改善アンケートは、5段階評価で回答するもののうち、その多くが教員の努力の評価を問うものが多い。そして5段階評価であると、まん中の3を選ぶ傾向にあることは否定できない。また無記名式で、回収は学生が行うが、集められたアンケート用紙を教員が受け取り、教員自身が集計後、振り返り、まとめたものを学校に報告するという方法を行っており、アンケートにおいては課題が山積している。

大学全入学時代と言われる昨今の学生の中には、「授業の積極的な参加」とは、授業の予習や復習を含む自己学習の習慣化、出席だけでなく質問や応答などの積極的な参加のことであるが、そうではなくただ出席しているだけで、「授業の積極的な参加」だととらえている学生も存在する。また授業参加の成果を自己のキャリア形成に役立てることを意識できているかどうか不明である。

他大学等の場合、学生の低学力に対応するため、学習支援センターを学内に整備しているところも多い。また、授業改善アンケートは、記名式に変更する学校や、eラーニングシステムとしてオンラインで実施、結果を学生に返す学校もあり、公開方法についても様々だ。集計方法は、教員に不都合なアンケートを抜き取る可能性もあるため、マークシートを使用し事務処理をしやすくし、事務局や業者に集計を委託するケースが多くなってきている。

上記のことから今後、設問内容・尺度設定および実施・集計方法の適切性、並びにアンケートの回答データから得られる潜在因子の因果関係や集団としての学生の特性等について、組織的・継続的な考察を行い、教員・学生・学校が一体になって、授業改善に取り組むことが必要であると考えられる。

妥当で信頼できる結果を学生に還元したい

家政学科 川俣幸一

平成25年度を含めこの7年間の思い浮かべたい。平成19年度にFD委員会が発足し、私はオープニングスタッフ（オープニング委員？）としてメンバーに加わった。委員全員が右も左も分からぬ中、まずは多数の他大学の授業改善アンケートから本学にも当てはまりそうな質問項目を抜き出したプレアンケートを作成し、最終的に20項目前後からなる授業改善アンケートを完成させた。当時の委員長ならびに他メンバーのご努力には頭の下がる思いであった。委員全員が目回る忙しさであったが、1つのものを作る充実感があった。

その数年後、この20項目を減らそうという話になったのだが、現在の形になった経緯として、とある授業を履修した僅か43人の結果のみを原案に変更されているのは余り知られていない。アンケートが集まらなかった背景はあるものの、総合満足度が平均4.2点の高得点の結果のみである事、対象群の内的整合性が高すぎる結果である事（クロンバック $\alpha=0.935$ ）、そして何より（全学生の6-7%に過ぎない）とある1クラスが履修した授業の結果のみで全学の変更を行っていく事に再取組を促したが、鶴の一声で決定した。その後、学科長にお願いしてFD委員会を退かせていただいた。外から自分なりのやり方でこの生まれたばかりのFDアンケートと向き合いたかったからである。そして私のFD活動はより良い授業法の模索は元より、このアンケートの信頼性を高めるための統計的手法の検討となった。紆余曲折を経たが、現在は二項検定やロジスティック回帰分析を用いることで落ち着いている。

FD委員会が発足して7年、当時分析を担当した先生も本学を去り、当時の委員長も代替わりをしている。毎年、集談会で素晴らしいSDアンケートの結果発表を見るたびに、我々はいつまでこのアンケートで授業の考察を行っていかなくてはならないのかと寂しい気持ちになる。最後になるが、より良いアンケート用紙だけがFD活動でない事は深く承知している。アンケート結果を参考に、デジタルではなくアナログに学生と真摯に向き合っていきたい。

編集後記

FD通信第6号をお届けします。本号も多くの方々より多大なるご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

本通信が発行されるようになって、すでに3年が経過しました。それらを見るとこれまでの本学におけるFDに関する歩みを振り返ることができます。今後は、これまでの歩みを検証するとともに、地域に必要とされる人材を育成する短大としての使命が果たせるようFD活動を充実させていければと思います。そのためにも本通信によって、さらに多くの情報が共有され、教職員相互の連携が深まりますことを願っています。（教務委員 千 裕美）

飯田女子短期大学FD通信 No.6（発行日 2014年3月31日） 編集担当 教務委員会

委員長 松崎行代

委員 岩崎みずず 及川直樹 小笠原京子 北林ちなみ 黒岩長造 近藤民恵 庄司洋江 千 裕美 登内芳子 友竹浩之

※FD通信へのご意見ご感想をお待ちしております。fd@iidawjc.ac.jp